第４回旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会	
日時	平成２９年９月２７日
開催場所	横浜市庁舎　５階関係執務室
出席者	涌井 雅之、池田 典義、岸井 隆幸、隈 研吾、坂井 文、福岡 孝則、水谷　初子、三輪 律江、若松 浩文、和田 新也、町田 誠、佐藤 紳
欠席者	坂田 宏、須磨 佳津江、保井　美樹、渡辺 真理
開催形態	公開（傍聴人 10 名）
議事	開催理念、事業展開、事業構成
資料	（１）資料１：委員名簿 （２）資料２：席次表 （３）資料３：第４回委員会資料

議事内容

１ 開会の挨拶

【事務局】

・定刻となりましたので、ただいまから第4回国際園芸博覧会招致検討委員会を開催させていただきます。当委員会の事務局を担当いたします政策局政策課の担当課長の折居でございます。みなさまにおかれましてはお忙しい中、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。まず始めに、当委員会は横浜市付属の機関の会議の公開に関する要綱に基づき、公開とさせていただきます。傍聴の方がいらっしゃるとともに、会議録も公開となりますので、ご了承ください。

２ 議事

【事務局】

・次第に沿って、議事進行いたします。涌井委員長お願い致します。

【涌井委員長】

・今回の委員会は、前回の委員会と同様に基本構想案をとりまとめて、市民意見募集等に諮るための事前の審議をすることが目的であります。大変重要な折り目にあると考えています。まず、事務局の方から開催理念、事業展開、事業構想すべてご説明いただいてから、委員の意見交換をしたいと思います。

【事務局】

≪資料3の説明≫

【涌井委員長】

・今までの整理をしますと、開催都市横浜としては、こういうコンセプトと会場構成をもって、ぜひこの時期にA1クラスの国際園芸博覧会を開催したい、という旨を国にお願いをし、国が開催を検討した上で、AIPH、BIEの方に提出することになります。仮に国がそのような方向で推進していくことになれば、国が新たに委員会を組織して、話をまとめていく段取りとなります。現実には横浜市の意見が重要で、本日説明した内容を今回と次回の委員会

で検討し、それらの議論を踏まえて、広く横浜市民に問いかけをして、それをとりまとめて国にお願いをするという段取りになります。

・事務局からテーマを「Scenery of Happiness」にするという説明がありましたが、前回の議論から、委員長としてお預かりしましたが、時間の都合等により数名の委員の意見を伺い、方向性を取りまとめさせていただき、ご了解を得ました。それを踏まえ、事務局が取りまとめてきましたので、今回の委員会でご報告することを付け加えてさせていただきます。

・まず、和田氏にAIPHの副会長の立場から、段取りに関する所感を賜りたいと思います。

【和田委員】

・トータルの段取りは、政府が最終的に決めることになります。横浜市として、こういうスタンスで開催したいという旨を発信していくことが大事になります。

・現在AIPHの総会が開催されており、横浜市として本気で招致を検討していることを市から資料をいただきまして、総会で紹介する段取りになっています。

・先週、現在施工中の園芸博覧会会場視察のため中国の北京に行きました。2019年に北京ではＡ1規模の博覧会を開催予定で、1,600万人以上の来場を目標に掲げています。

・近年の流れではテーマや事業構成のレベルなのかはわかりませんが、ビジネスの側面をしっかりと捉えていこうとする流れがあります。フェンローや北京もそのような流れで取り組んでいます。開催の裏側には経済活動の支えがあることで理念が実現していることからすると、この博覧会の中でどのような方法論でビジネスの取り込みが図れるかがカギになります。

・テーマそのものについて、幸せを導くシナリオは素晴らしい表題だと思います。その中で、「人類が、自然がもたらす生態系最大の享受者であり、幸福を求める唯一のいきものである」と書かれていますが共生とか寛容と並べて書いている中で、「唯一のいきもの人類」と書いているのには、違和感があります。あまり哲学的になると議論にそぐわないと思いますが、幸せ感は人類だけしか感じないのかという疑問もあります。

【涌井委員長】

・ただいまの和田委員で段取りや傾向のさらなるヒントが得られました。また、理念その他についても、事務局は参考になったかと思います。

【福岡委員】

・理念に関して「幸せを導く風景」ということですが、この理念を英語に訳した時に海外の人にはどのように伝わるかという視点で説明を聞いていました。そうした視点で見ると、全体的に分かりにくい表現になっていると思います。理念の説明文章がすべて招致に使用されるとは思いませんが、何を伝えたいのかを明確にした方が良いと思います。

・この理念において、「花と緑を媒介にして、ふれ合いや成熟した日本の社会の中での自然との関わりが、価値を新しく導いてくれる」というコンセプトは素晴らしいものです。しかし、一点だけ気になる点がありました。市民の参加やシェアの話の中がありましたが、このようなハピネスは与えられるものや自然とのふれ合いだけで天から降ってくるものではなく、もう少し市民たちが「みどりを媒介とした都市づくり」に積極的に関わり、自律

的に価値をつくり上げていくような中にハピネスがあると思います。こうした点について言葉としてハピネスとして整理されないといけないと考えました。どのようなハピネスかということをもう少し整理できると良いかもしれません。

・世界に向けて横浜にしかないもの、横浜という場所で開催する意義を伝えることが非常に重要であります。それは、横浜らしさ、すなわち「ヨコハマネス」になると思います。P9にある横浜らしさをどう伝えるのかという部分が重要なポイントで、港湾部については認知されていますが、港北ニュータウンのグリーンマトリクス、田園都市、上瀬谷という場所、それから各地域資源の魅力を活かして成功した緑化フェアなど、それらを横浜市がどう評価し、これからの都市の骨格になっているかを整理し、これからどのように計画に繋げていくかが、アピールできるポイントとして資料に書かれていればよかったと思います。具体的には、将来に繋げていくための基盤、横浜らしさとして積層した都市の資源や魅力を包括的に整理されるとよいと思います。

・ グリーンインフラの意味について、横浜市としてどう考えているのかを示して頂きたいです。グリーンインフラには様々な理解、解釈があるため横浜市としての姿勢を整理されると良いです。私個人の考えでは、田園都市や緑化フェア、横浜市が培ってきた緑のまちづくりは、次世代の都市づくりの基盤になるものです。今までの取り組みをどう評価し、次にどう繋げていくのかを描いていただければ、非常に読みやすいと思います。

・ガーデンシティ横浜については、英語に訳すと古典的な田園都市のイメージとして訳されてしまうので、ガーデンシティに何か付すものが必要だと思います。将来の横浜市が新しいガーデンシティの形をどう描いていくのかを見せていく必要があります。その点がP21の会場構成のゾーニング図に現れるのかと思っています。このたたき台を見ますと、展示会場の周りに緑が修景として張り付いていて、水や樹林帯があるという旧来の弁当型の施設配置主体の構成になっています。次世代の田園都市、緑、園芸博覧会場、インフラを包括的に構想した新しい会場構成、それはネットワーク型なのかウェブ型なのかわかりませんが、次世代の都市のとして新しい構造（フレームワーク）を提示し、それがダイアグラム、イメージ図等で伝われれば良いと思います。しかしながら、博覧会ですので様々な展示施設やインフラの整備も必要になるでしょう。このような新しいコンセプトを踏まえた次世代型の会場の構成と考え方をどのように反映していくのかが気になりました。

【事務局】

・英語表記に関しては四苦八苦しているところです。委員の方から英語表記の方から先に考えるべきとの意見もあるので、英語表記も念頭に最終的なとりまとめまでには、整理したいと思います。

・「Scenery of Happiness」に関して積極的・能動的にするべきという点についてはご指摘の通りと思っていまして、ハピネスを待っているよりはハピネスを市民の力で新しい考え方で能動的にやっていくべきだと考えています。この文章の中に、ポジティブな幸福感という事ことで、こちらから幸福を求めていくというニュアンスを出したいと考えています。

・横浜らしさについては、これまで取り組んできたグリーンマトリクス、田園都市、都市緑化フェアの実績からこの博覧会を目標とするのではなく、むしろマイルストーンとしてそ

の先にあるガーデンシティをグリーンインフラで作っていきたいということを表記していきます。

・グリーンインフラについては、グリーンインフラとグレーインフラの対比ではなく、産業や雇用、教育、遊び、市民参加といった社会的共通資本のような幅広い概念で、しっかりグリーンインフラを捉えていくことが根底にあります。それらをもう少し具体的に表現していきたいと思います。

・ガーデンシティ横浜という言葉については、WISE、ネクスト、スマートなどの文字も入れようとしましたが、しっくりしたものがないので、現状は仮置きさせていただいています。政策の中身を詰めていく中で、ブラッシュアップしていきます。

・会場のレイアウトはご指摘の通り、これまでの大阪花博はゾーニング型、愛知万博ではクラスター型で計画され、それぞれ空間構造の捉え方が変わってきています。次の横浜国際園芸博覧会では新しい会場計画論をご提示していきたいと思っています。最終的な取りまとめまでにいろいろと練っていきたいと思っています。

【隈委員】

・ハピネスは世界に響く言葉で良いと思います。会場構成について、ゾーニング型、クラスター型があり、その次にネットワーク型があるとの話がありましたがその点についてはP21の図では古いと思います。ネットワーク型で、建物とみどりが対比するのではなく、全体のストラクチャーの問題だけではないと思います。箱のような室内空間と緑があるのではなく、半屋外のようなものが上手くデザインできると良いのではないでしょうか。これらは空調設備が必要なく、いろいろな風を感じることができ、寒さや暑さを直に感じられる方がハピネスだと思います。そのようなことを感じられる会場構成になればと思います。

・ミラノの博覧会は私も関係していて、その時にも新しい会場計画が出ているので、横浜市はその先をいかなければならないと思います。

・宿泊施設については、会場の中で宿泊できるものになるのでしょうか。

【事務局】

・周辺を含めてですがそういう方向でも検討をしています。

【隈委員】

・それは良いと思います。会場と言えばゲートがあってそこに人々が並ぶというイメージより会場の中に宿泊し、仕事をすることができるという開催の定義があると良いと思います。そうなると、入場者数もある程度絞る必要があります。今までの博覧会は人数が多く来ることが成功とされていますが、これからは人数をあらかじめシステムでコントロールしてその人たちがハピネスを体で体感できるようにする必要があります。そのような仕組みを取り入れることが、今までの博覧会を超えた会場自体の定義にできれば良いと思います。

【涌井委員長】

・私も事務局には、今回の博覧会で初めて一定期間開催前に仮住まいをして、色々なライフスタイルの提案をしていただくという仕方もあるのでないかという議論もしてきました。私たちは環境問題について緩和戦略で技術的対応してきたわけですが、これからはライフ

スタイルをパッシブで自然の資本財を上手に活用する1つの動きをここで作り出すという適応戦略に切り替えて、日本の伝統的な知恵で世界をリードしていければいいと思います。新しい時代に即応して表現していくことが魅力的にもなります。

【福岡委員】

・和田委員に質問ですが、招致活動を進める中で、博覧会の基本構想の評価とともに、市民の盛り上がりや参加の機運はどのように評価をされるのでしょうか。

【和田委員】

・オリンピックほどではないとしても、地域として要望している強いメッセージは必要です。以前スンチョンで行われたA2・B1規模の博覧会を視察に行きましたが、雨の中市民5,000人が熱烈なお出迎えをする光景がありました。他各地域でも同様に歓待を受けたというケースがありました。

【福岡委員】

・日本に訪れる外国人の中には2か月ほどの滞在で農業を体験しながら各地を旅したり、ファームステイや、京都や東京ではなく農業や自然などに魅力を感じ、その体験を求める層も少なからずいます。日本を訪れる外国人に日本訪問の目的を尋ねると、初めての人は知名度の高い観光地を見て回りますが、リピーターは地域固有の資源や、そこに住んでいる人や暮らしに高い興味を持っていることがわかりました。現代では世界中のどこのまちでも同じものがあるわけですが、横浜にしかない地域の資源や魅力は何でしょうか？博覧会開催に向けた横浜市民の盛り上がりだけでなく、「みどりのまちづくり」や「農の営み」など市民の生活を体験として共有することも、観光や今回の博覧会の成功のカギを握っているのではないかと思います。

【池田委員】

・観光の件ですが、ビジネスの観点から日本は経済成長のために観光立国でやっていくことが政府としての大きな課題です。今年は2,000万人、来年には3,000万人の外国人観光客を見込んでいます。世界的にも第3位の経済大国なので、花や緑や水などは先進国同様枯渇していると思われていますが、そうではない点を世界にアピールできる場になればと思います。

・日本の森林のうち90%は先人たちによって作り変えて継承されてきたものです。経済大国でありながら、自然や環境にやさしく共生してきたことは世界を見ても日本だけでしょう。この点をテーマにすれば政府としても応援してくれるであろうし、その典型的なまちが横浜市であり、そういうまちが日本各地に点在していることが福岡委員の話にも繋がるのではないでしょうか。

【水谷委員】

・インバウンドの観光客が何を求めているかと言うと、そこに暮らす人との交流や暮らしぶりを実際に見たり話したりすることで、それが一番の印象になることが多いというデータが出ています。今回のお話を聞いていて、どのような形で展開していくのかはこの後の議論になるのかもしれませんが、事業コンテンツの中に「交流」の言葉があるにも関わらず、「人」があまりでてこないのが気になりました。

・今、観光ではオーバーツーリズムという言葉で、多くの観光客の来訪で地域が過密状態となり、地元も観光客も満足できずにいるという問題もあります。人数を絞ることでそこでしか体験できない何かを感じて頂く考え方もあるかもしれません。
・交流には人材育成の側面もあるかと思います。国内外からを問わず教育旅行では、そこで何を感じてもらうのかを考えることも重要です。生物多様性などの自然との共生も含めて、小さいころの学びをここで得ていき、将来再び日本や横浜に戻ってきてもらうようなものを作っていくという考えもあるのではないでしょうか。

【涌井委員長】
・今年度のツーリズムジャパンエキスポの中で一番目を引いたのが、「大歩危・小歩危・祖谷」と言われる限界集落の街です。あえて限界集落の暮らしを体験するということで年間約 7,600 人の外国人観光客が訪れており、SNS 等で世界中から注目されています。理念にも記載されていますが感性価値といった参加体験が、ただ見ることより重要になってきています。知識より知覚の方がウェイトを占める可能性が出てくるかもしれません。
・私の印象を言えば少し冒頭の理念について緑に偏りすぎている気がします。池田委員や和田委員の指摘のように次の時代のビジネスを考えたときに、ライフスタイルのあり方を提供することや感性に訴えた新しいイノベーションやクリエーションとのビジネスの融合の世界はとても大きいです。この点について花や緑が貢献できれば農的風景や農的な仕組み、しぐさがそのようなものに触発されることに持っていくべきではないでしょうか。
・現在 400 人に 1 人の割合で引きこもり児童がいることや、先端産業になればなるほどストレスマネジメントが生産性を維持するのに最大の問題となる面もあるので、花や緑など博覧会がどう貢献できるかが 1 つの目標にもなるかと思います。

【坂井委員】
・P14 の事業コンセプトについてあまり議論がされてきていませんでしたが、私が最初に浮かんだのが「育」というテーマです。交流や花、緑にしても「育つ」は当てはまりますし、能動的な動詞をキーワードに入れてはどうでしょうか。
・P12 のグリーンインフラについて今回の博覧会で扱っていくと同時に、グレーインフラとの融合も敷地内で実験的に進めていく必要があります。広い土地でグレーインフラとグリーンインフラをこれからどのように作っていくのかを提案できると面白いのではないでしょうか。その際に半屋外といった今までにないような施設が出来ると良いです。
・土地利用図にもありますが中域や広域で見ると緑の線が繋がっていくオルムステッドのボストンのエメラルドネックレスのような、21 世紀型の新たな緑のネットワークが具体的にも物理的にも中域圏にできるとよいでしょう。
・昨今のグリーンインフラは物理的に見える緑だけでなく、循環型都市社会ということもあるので、そこに何か循環型のシステムも敷地内で実験的に行うことで瀬谷という地域がエコな街であることを打ち出せるのではないでしょうか。
・P13 のガーデンシティについては古いイメージがあります。今回の検討している言葉を英語に訳すとガーデンとシティになってしまいますが、他の単語を何か付け加えるか他の言葉を選んで、皆が同じ方向を目指せる言葉にできれば良いと思います。

【涌井委員長】

・敷地内だけの地図で議論するのは限界があるので、今回は周辺土地利用図も用意するように指示しました。地域全体の土地利用として考えていかなくてはいけません。博覧会だけの会場として考えていくのではなく、この地域にどんな緑を創出していくのか、あるいは再整備していくのかを地域全体で考えていかないと博覧会は何となく見せ物だけに終わってしまう恐れがあります。

【岸井委員】

・基本理念について、P5 の 2 つ目以降から突然、日本国内や先進国的な問題が示されています。世界をみると、SDGs にあるように貧困や生きていくことへの重要性が数量としては重要です。P5 の一番最後には「緑と花、農がもたらす実り」とありますが、緑のもたらす恵みの方も大事で、社会がどんな時代にあろうともグリーンというものが社会の基盤として重要です。発展の初期段階では食料を生産する場であり雇用の場であります。都市は広がっていきますが、ただ農地をつぶして広がっていくだけでは上手くいきません。都市の発展段階にあってグリーンの果たすべき役割は変わって行きますし、成熟した社会でもライフスタイルのようにまた違った役割があるでしょう。どの都市のどの段階でも社会の基盤としてのグリーンは必要になることを言うのには、基本理念として P5 に書いてある 2 つ目から 5 つ目だけでは説明しきれないのではないでしょうか。

・テーマについては最終的に英語でうまく伝える必要があります。

・先ほど入場者数の話が出ましたが、1,500 万人誘致しようとすると 80ha～100ha の広さのうち 30ha を駐車場としても 1 万台程度しか駐車できないでしょう。1,500 万人を 180 日間で呼び込むとすると 1 日約 8 万人となります。平日 6 万人、休日を 12 万にとした場合、ピークから上位 20 位程度の来場者数を想定してインフラを作るという事になるので 16 万人は計画基準として考える必要があります。そのように見た時に 30ha の駐車場だけではとても足りないことになります。交通基盤として 1,500 万人を支える仕組みが必要ではないでしょうか。駐車場の整備を考えていかないと入場者数の設定は現実的にならないかもしれません。

【事務局】

・入場者数の設定については事務局でも悩んでいるところです。旧上瀬谷通信施設の土地利用と整合を図りながら、関連公共事業として交通基盤を整備することになっていますが、現在庁内一丸で検討を進めていますし、地元の方々とも対話をしながら土地利用を決めていかなくてはならないと考えています。その点では今回提示しているように、新たな交通システムの導入等についても検討しなくてはならないと考えていますが、現段階では資料として提示できるものになっていません。過去の博覧会の状況を見ますと、入場者数の 1.5%程度がピーク時の人数になることがわかっていますので、仮に 1,500 万人を目標とするのであれば岸井委員が指摘したように相当の人を輸送する必要があります。会場周辺は道路付きの良い場所で自動車交通優位ではありますが、一方で今回は園芸博覧会なので環境負荷を少なくすることも重要なテーマになるかと思います。そのような点も勘案しながら交通システム等を次回、あるいは最終とりまとめの中で熟度を上げながら記載できれ

ばと考えています。

【涌井委員長】

・次に深めていかなくてはならないのが、この博覧会の成功を、何をもって成功とするのかです。先ほどから委員の皆様から指摘がありましたが、量なのか質なのか、あるいは量であり質なのかという事です。その点について考え方を現実と対比させながらどのような方策にするのかを決めていくのかが大きな課題になるでしょう。

【若松委員】

・入場者数はマーケット的には問題なく達成できると思います。一番の問題は駐車場やアクセス性になるでしょう。博覧会はやはり事業でもあるので、当然多くの人に来場してもらう必要があります。マス来場者への対応をしていくことや、なおかつ深い体験をしてもらうことなどの形が重なっている、博覧会の見え方になっていないのだと思います。

・P14 のコンテンツのイメージについて、出展者がどういう活動やイメージを持つのかということなどの繋がりのイメージがもう少し現れてくると、将来のイノベーションの形や展示の形や参加の仕方が違ってくると思います。

・グリーンインフラを今回新しい言葉として表現しようとしていますが、これがうまく表現できれば伝わると思います。グリーンインフラの言葉そのままだと伝わらないかもしれないので、別の言葉を探すことで上手く表現できると良いのかもしれません。

【隈委員】

・入場者数について、ただ人数が集まらなかったら失敗ではなくて、コントロールの仕掛けでどんな人に優先的に入場者してもらうかといった所で、新たな哲学でのコントロールのシステムがあると、逆に人数が少ないことでプラスの価値になっていて、人数が少なくても別のビジネスマッチングがあって事業的には大きな成功があるとすれば、それは入場者数とは必ずしも比例するのではなくて、逆に入場者数にむしろ反比例する形のビジネス的な成功があると新しい感じがします。

【若松委員】

・隈委員の指摘したことも今回解いていかなければならないと思います。愛・地球博の時もそうでしたが、時間を計ってみると見ている時間より待っている時間の方が大きいです。いかに待っている時間を楽しく見せるかが重要になると思います。

【岸井委員】

・入場者計画については会場計画を決めるうえでは必ず必要になるので、その点については考えなくてはいけません。しかし、それが目標になるかということは少し違っていて、むしろ私たちとしては園芸博の開催前から閉会後までに関わってくれる人が、どの程度いるのかなどを目標値にした方が正しいのではないでしょうか。会場についてはきちんと整備していくので、そのために来場者数についてもきちんと考えなくてはいけません。そのための想定する数字として 1,500 万人とするのであれば足りないかもしれません。本当に無理であるなら来場者をコントロールせざるを得ないと思います。その点についてははっきりとした見極めをする必要がありますが、来場者数だけを目標としない方が良いのではないでしょうか。

【涌井委員長】
・1,500 万人訪れた愛・地球博はリピーターによる来場者が多かったです。今回はひょっとするとニューライフスタイルコリドーのようなものが会場内のどこかにあって、そこに開催の半年前から住んでいただいて、それらが場合によっては民宿のような形で後ろの農園でとれた料理が食べられることになったりすると良いかもしれません。これらは今までの見せる博覧会とは違ったものになるかもしれません。
・一方でそれぞれの企業が色々な展示をして頂く、待ちながら見たい人に応える展示の仕方もあるのではないでしょうか。iPad や iPhone の新製品の時のように行列ができても待つ人がいるように、待つことに価値を持つ人もいるので、様々なパターンを上手に併せてそれぞれの満足度を高めていけると面白いのではないでしょうか。今までの会場づくりにはなかった新たなシステムの構築がこれからの重要な課題になってくると思います。
【三輪委員】
・今までの博覧会についてはどうしても非日常をイメージしているものが多かったです。これらをいかに日常に浸透させるかが課題だと思います。それには風景がキーワードになると思います。
・住宅地開発をする際にハーブシェアガーデンのように庭先のハーブを近所の人同士で育てて、好きな時に収穫することを計画して家を売り出す不動産企業もあります。参加を前提にした住宅地開発のように、グリーンインフラとグレーインフラを周囲の日常として横浜市の郊外部のあり方を提示していくことへの挑戦とした方が良いのではないでしょうか。今までの博覧会のような、展示を見るだけの非日常のタイプよりは、さらに言えば単に「体験的に宿泊する」よりは長期で「暮らし」を経験してみたり、暮らしを見せる機会をつくることで、来場することで自分の日常と近づけて持ち帰ってもらうことや、次のステップに進んで頂くきっかけにする仕組みになると良いと思います。
・福祉のキーワードがあまり見られないのが気になりました。障がい者や教育の発想が必要になるでしょう。福祉というキーワードで捉えると学校教育は受動的な発想になりがちですが、福祉的な発想でみると能動的な意味合いを含んでいます。障がい者の方が農と共存して自分たちの生きる術を確立していくソーシャルビジネス的な話を展開しているので、全体を見た時に福祉のキーワードを加えると良いと思います。
【岸井委員】
・グリーンインフラとグレーインフラは対峙的なものではないと考えています。そのような概念で捉えてしまうと今回の課題は解けないと思います。議論が必要になるかと思いますが、違う概念で考える必要があるとのではないでしょうか。
【坂井委員】
・グレーインフラはこれまで成熟した社会で随分と出来上がっていますが、グリーンインフラは点的整備で、ネットワーク化が不十分であったという面があります。これらのネットワークとネットワークを重ね合せて重層的に扱いたい。そのあたりは注意して使う必要があります。横浜市が考えるグリーンインフラとは何かを定義した上で、それを具現化したものを今回の博覧会で周囲に浸透させていくといったストーリーの作り方もあると思い

ます。

【涌井委員長】

・2022 年は生産緑地法の転換点になります。都心部では集約化が進んできており、人口が減少し続けると郊外部がスポンジ化と言われるようにポーラスな状態になってしまい、きちんとコントロールしていかないと立ち行かなくなる恐れがあります。都市農業や郊外部の農的風景や緑地などをしっかり位置付ける新たな整序の概念を持たないと、コンパクトシティそのものの概念が危ぶまれてしまいます。ちょうどその頃に 2026 年が差し掛かってくるのであればこれは重要な政策になるのではないでしょうか。

【岸井委員】

・日本や先進諸国にとっては重要な課題になるでしょう。今回、上瀬谷でこの課題を解いておくことで、今後起こる中国や韓国での解決策を提供できると思います。農業や緑の空間が、従来の都市と農村の対峙でなく新しいライフスタイルのあり方を提案できると面白いのではないでしょうか。

【涌井委員長】

・今までは西行のように徹底して自然と同化して花の下で死んでいかなくてはならないような発想が多い気がします。一方で鴨長明はしたたかに隠遁ごっこをしています。多くの人は農業ごっこのようにごっこ遊びをしたいのでしょう。だからといって真剣に農業をしたい人は少ないですが、農的生活をしたい人はたくさんいます。高齢になるとなおさら健康や仲間作りのために意識が強くなる傾向があります。

・防災やエコシステムの中でも、郊外部でもきちんとしたソーシャルベネフィットを都心部にもたらす関係があります。それぞれの財政負担の割合や税の還元の仕組の仕方に結びついていけば横浜モデルを世界モデルとして打ち出せるのではないでしょうか。

【町田課長】

・今の都市がポーラスだとかスポンジ化になっていると言われていますが、解決策を打ち出せる人がいないのが現状です。オープンスペース系の仕事をしていると、狭義の意味で都市サイドの緑でそれらを埋め尽くせることはありません。そのようなギリギリの中で都市のオープンスペースの施策が打たれています。今回の参考資料に横浜市の農業施策現況図がありますが、都市農業については横浜市にこれだけ振興地域がある中で、この園芸博で都市農業を本気で考える価値があるのではという気がします。2022 年に 30 年目を迎える生産緑地が増えることを背景に生産緑地法が改正されました。できる限り都市の農業が永続的に有利な形で進められるような環境が徐々に整えられています。このような意味を今回横浜で見せられると良いと思っています。

・アクセスの話がありましたが、和田委員からも説明があったように博覧会本体は市で検討したものを国が引き受けていく事になります。しかし、国が引き受けることになってもアクセス性やインフラなどがきちんと整理できるという状態であることなどを、横浜市が本気になって考えてくれないと国が担ぎますとは言えないと思います。愛知万博の際は 2,200 万人が来場しています。そのうちリニモが 4 割弱、バスで 4 割、残りの 2 割はリピーターなどによる自転車での入場です。1,500 万人をどう呼ぶかや目標の立て方にもより

ますが、あまりにも目標来場者数が少ないと本当に国が担ぐ博覧会なのかという見方をされる懸念があります。きちんと来場者が会場に到着できるという計画が示されないと、国が引き受けられないことにも繋がります。

・基本理念の文章を読んでいましたが、横浜市が博覧会を経た後にどんな都市像になっているかをもっと見えるようにするべきではないでしょうか。文章の中で「観光」のキーワードが１度しか出てきていないです。国が掲げている大きな施策の柱として観光があるので、緑や花の力で都市の将来像を見せられると良いです。またそれがインバウンドや観光の原動力になるということが横浜市なら言えるのではないでしょうか。関東の他の政令指定都市ではなかなか言いにくいことだと思います。横浜市だから言えるということを勇気を出してもらって、シンガポールの様に花や緑が大きな観光の資源になるということを示してほしいです。

【佐藤課長】

・先ほど委員長から農業ごっこで農業をしたい人は多いが、真剣に農業をしたい人は少ないとの話がありましたが、最初は農業ごっこでも、これをきっかけとして、新しく農業に参画する者が増えることにも繋がるのではないかと考えております。

【涌井委員長】

・今日の議論を更に整理して熟度を上げた案としていきたいと思います。

・今回花や緑をテーマにしていますが、岸井委員が指摘していたように冒頭で SDGｓをもっと前面に出して、誰もが取り残されない社会を実現させるために、日本や横浜がどんな役割を果せるのか、それらが経済と暮らしとどう両立できるのかという理念の整理の仕方をもう一度ブラッシュアップして頂きたいと思います。会場計画もきれいな会場計画だけでなく、もっとフラクタルな会場計画の方が可能性があると思います。表現の仕方なども本日の委員の方々の様々な意見を参考にして頂ければと思います。

・なお将来土地利用や交通アクセスの問題については庁内調整を急いでいただいて、次回の委員会できちんとした議論が出来るようにして頂きたいです。

３．閉会

【事務局】

・次回の委員会につきましては、11 月 2 日木曜日、午前 10 時から 12 時、関内周辺での開催を予定しております。

以上